

4. 開かれた大学を目指して ―クラフト教室の実践―

(代表) 石川 善朗	(教育学部 学校教育教員養成課程 技術教育コース 3年)
石黒 雄大	(教育学部 学校教育教員養成課程 技術教育コース 2年)
千山 照生	(教育学部 学校教育教員養成課程 技術教育コース 2年)
加藤 拓也	(教育学部 学校教育教員養成課程 技術教育コース 2年)

指導教員

岳野 公人 (教育学部 准教授)

1. はじめに

開かれた大学を目指す、言い換えれば、地域とのつながりを深めるために、本研究では、クラフト教室を行った。これまでに私は環境保全を目的とするグループで活動し、クラフト教室を行ってきた。クラフト教室を行うことで環境保全やものづくりに対する意識の変容を調べてきたが、大学内で行うクラフト教室には、その他にもできることがあるのではないかと考えた。クラフト教室の参加者には、小さな子どもからご年輩の方まで幅広い年齢層の方々がいる。環境保全やものづくりに興味を持ってもらうことや、再度クラフト教室に参加してもらえるように活動を行ってきた。この活動は、大学と地域をつなぐ一つの方法ではないかと考えた。これらを踏まえて、本研究では、開かれた大学を目指すために、地域住民 44 名を対象にクラフト教室を実践した。クラフト教室を行ったことで、大学と地域が繋がる一端を担えたかを検討する。

2. クラフト教室の実践

2-1 実践方法

実践対象:石川県内住民 44 名。

里山内の風雪により倒木した木材や間伐材などの自然木を材料とする。自然木を利用してバターナイフを制作する。クラフト教室の事前、事後に調査を行う。

調査票は、岳野ら¹⁾が作成した事前用(16項目)、事後用(18項目)に「継続性」の2項目を事前調査に付け足したものである。回答は7段階尺度で行った。また、自由記述調査をバターナイフ製作後に行った。

2-2 実践計画

本研究の研究計画を表1に示す。2008年3月～6月は、岳野ら¹⁾の木材加工を通じた環境教育の授業実践を参考にして、クラフト教室を行った。5、6月はクラフト教室の準備、研修を行い、クラフト教室の予備実践として、職人から指導を受ける。また、より参加者に楽しんでもらえるクラフト教室にするため、他大学と意見交換を行った。7月は材料取り(写真1参照)を行った。7月～9月

は里山に入り、間伐や下草刈りを行う。またそれに伴い、工具の手入れ(写真2参照)や材料取りを行う。12月～2月にかけては3月のクラフト教室に向けて準備を行った。2009年3月にクラフト教室を行った。また、来年度への引継ぎとして1年間のまとめを行う。

表1 研究計画

項目	2008年												2009年			備考	
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
材料取り					■	■	■	■	■	■	■	■	■				
工具の手入れ					■	■	■	■	■	■	■	■	■				
里山活動(間伐)					■	■	■	■	■	■	■	■	■				
里山活動(下草刈り)					■	■	■	■	■	■	■	■	■				
職人からの指導			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
クラフト教室の練習 (意見交換)				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
クラフト教室	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
クラフト教室の準備													■	■	■	■	■



写真1 材料取り



写真2 工具の手入れ

3. 実践結果及び考察

3-1 実践結果

参加者は、みなバターナイフを完成させることが出来た。バターナイフ製作の前に、私が活動しているグループの活動内容を紹介した(写真3参照)。活動内容を紹介することで、参加者に環境保全に興味を持ってもらうというねらいがある。バターナイフ製作中に休憩時間を設け、参加者同士また講師との雑談を通して、作業がしやすい良い雰囲気を作り出した。また、製作中はすべての参加者が集中して取り組んでいた(写真4参照)。参加者が作成したバターナイフの例を写真に示す(写真5参照)。



写真3 活動紹介



写真4 製作中

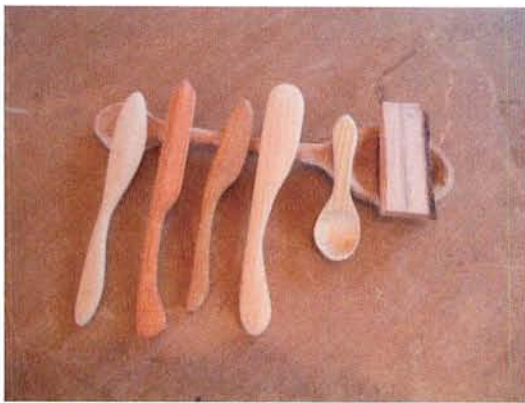


写真5 完成品

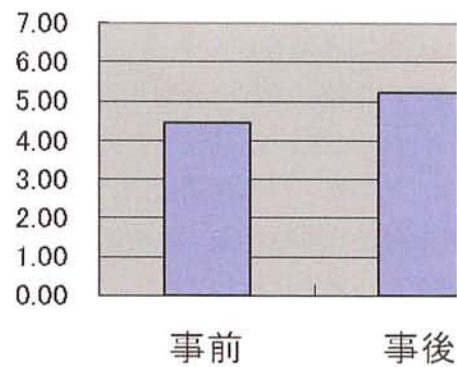


図1 事前調査及び事後調査の得点の平均値

3-2 事前事後による調査結果

事前調査と事後調査の合計得点の平均値に対してt検定を行った結果を図1に示す。その結果、事前と事後調査に1%水準の有意差が認められた。また、事前調査の平均値が4.50、事後調査は平均値が5.20となり、7段階尺度の「4:どちらでもない」から「5:ややそう思う」に上昇した。したがって、本研究のクラフト教室を通して、参加者の意識を高めることができたと考えられる。さらにどのようにして意識が変容するかを明らかにした。上昇群、下降群を属性として項目群ごとにt検定を行った結果を表3に示す。調査における上昇群、下降群とは、事前と事後調査の合計得点がプラスに変容した参加者30名を上昇群、マイナスに変容した参加者3名を下降群としている。また、上昇群、下降群の事前と事後調査の合計得点の平均値に対してt検定を行った結果、上昇群に1%水準の有意差が認められ、下降群には、有意差が認められなかった。下降群に有意差が認められなかった要因として、対象となる人数が極めて少数であったことが考えられる。逆に言えば、参加者のほぼすべての人がクラフト教室に参加したことで意識の高まりがあり、クラフト教室に好意的であったと言える。表に示すように、上昇群は、「集中力」「達成感」「向上心」「ストレス」「自己肯定感」「継続性」の項目群において有意差が認められ、意識が高まる方向へ変容していくことが明らかとなった。特に「継続性」は、大学と地域をこれから繋いでいく上で重要な項目群であり、再度、

大学に訪れクラフト教室に参加する参加者の意欲が感じられる。

下降群は、「自己肯定感」に関する項目群において有意差が認められ、「自己肯定感」は意識が低くなる方向へ変容することが明らかとなった。下降群は事前と事後で意識を低下させている。つまり、項目群の分析から下降群の意識低下の要因は、「自己肯定感」によるものと推察できる。

表 3 意識調査の項目群別における上昇群及び下降群の平均値

		集中力	達成感	向上心	自然との関わり	環境問題への志向性	ストレス	自己肯定感	ものづくりへの志向性	継続性
上昇群 (30名)	平均値(事前)	4.75	4.62	5.20	4.55	4.93	3.45	3.82	5.09	3.92
	平均値(事後)	5.49	5.37	6.47	4.12	4.93	5.72	4.70	5.55	5.44
	有意差検定	**	**	**	n.s.	n.s.	**	**	+	**
下降群 (3名)	平均値(事前)	4.83	4.50	5.84	4.83	5.34	3.33	4.17	5.17	4.67
	平均値(事後)	5.67	4.50	5.84	2.33	3.33	5.17	2.33	4.17	4.00
	有意差検定	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.

**：1%水準，*：5%水準，+：有意傾向，n.s.：有意でない

3-3 自由記述による回答

クラフト教室実践後に調査した自由記述の回答例を表 4 に示す。

上昇群の自由記述から、「継続性」に関する項目群の記述が認められた。例えば、「また機会があれば参加してみたい」や「作品は、もう少し丁寧に作れるように次回がんばりたい。」といった記述である。意識調査の結果では、「継続性」の項目群は意識が高まる方向へ変容しており、自由記述からも再度クラフト教室に参加する意識を確認することができる。参加者が大学に訪れるようになることで、クラフト教室に参加するだけでなく、図書館の利用や公開講座への参加など地域住民が大学を利用することに繋がっていく。これは、クラフト教室行ったことで、また、これからもクラフト教室を行っていくことで大学と地域を繋ぐ一端を担い、開かれた大学に近づくと考えられる。つまり、本研究で実践したクラフト教室は意味のあった実践であったと言える。

表 4 上昇群及び下降群の自由記述の回答例

上昇群の自由記述

・バターナイフの見本があったので、作業にとりかかりやすかったです。天気も良く鳥の鳴き声の間こえる中とてもゆったりとした時間が過ごせました。自分で作ったバターナイフなので、これから愛着を持って使っていくと思います。とても楽しかったです。ありがとうございました。

・集中してとり組め、ストレス解消になった。木など、自然のものにふれていると気持ち良くいやされました。子どもも日頃ゲームやテレビで遊ぶことが多く、またこのような機会があれば参加し、自然とふれあうことを体験させたいと思いました。ありがとうございました。

・楽しみにしていた反面、刃物使いが苦手な私に作れるのだろうか…という思いもありましたが、丁寧にきめ細やかな指導と参加者の方々のアットホームな雰囲気の中で楽しく作ることができました。木目や木材を見たり、形を考えたり、この木をいかしてうまく作ろうと考える時間など普段木のことをあまり考える時間はないが、こういう場面をきっかけに少しずつ見つめる目も変わっていくんだなと思いました。

・今回は、家族でクラフト教室に参加した。普段一緒にいる時間が少ないので、のんびりと楽しく過ごすことができた。子どもたちも楽しそうで、4人で継続して活動できるといいなと思いました。作品は、もう少し丁寧に作れるように次回がんばりたい。

下降群の自由記述

・思っていたよりずっと楽しかったです。いろいろな要素を取り込んだ取り組みだったんですね。まったく知らずに参加したので、勉強にもなりました。ありがとうございました。

・とてもおもしろい。次に作るのなら、お菓子作りで使う「へら」などをつくりたい。不満な点は時間が少ない。もっと細かいやすりがほしい。

*文章の言葉の表記は自由記述の回答と同じである

4. まとめ

本研究では、自然木を利用したバターナイフを題材としてクラフト教室を行い、大学と地域が繋がる一端を担えたかを考察した。その結果以下のことが明らかになった。

- 1)意識の変容を調査票で分析すると、上昇群は「集中力」「達成感」「向上心」「ストレス」「自己肯定感」「継続性」の項目群において意識が高まる方向へ変容した。下降群は、「自己肯定感」に関する項目群において意識が低くなる方向へ変容した。これは、下降群の意識を低下させた要因と推察できる。
- 2)上昇群の「継続性」に関する項目群の意識の高まりは自由記述においても確認できた。この結果は、今回、クラフト教室を大学と地域を繋ぐ役割として実践したことが意味のあった実践であるということがわかる。

5. 謝辞

本研究は、平成 20 年度金沢大学学長研究奨励費の援助を受け研究を行いました。本研究を進めるにあたり、クラフト教室に参加してくださった地域住民のみなさんに多大なご協力を賜りました。ここに記して心よりお礼申し上げます。

6. 引用文献及び参考文献

- 1) 岳野公人, 守田弘道:「木材加工を通じた環境教育に関する授業実践」, 教育実践研究 34 号, pp43-48, 2008